

聖書：マタイ 9：35～10：4

説教題：収穫のために働き手を

日時：2019年3月10日（朝拝）

35節はこれまでのまとめの句です。「それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。」5～7章までは山上の説教と呼ばれるイエス様の教えが、それに続く8～9章まではイエス様による様々ないやしのみわざが記されました。そのイエス様の活動全体を35節は要約しています。と同時にこれは新しい話へ移るための言葉でもあります。そういう意味で蝶番のような箇所です。そして新しい内容に移るにあたってマタイが36節で記しているのはイエス様の目またお心についてです。

36節にイエス様は群衆を見て「深くあわれまれた」とあります。この言葉は聖書で特別な意味を持つ言葉です。第3版までは「かわいそうに思われた」と訳されていました。二つのことを申し上げたいと思います。一つはこの言葉は原語のギリシャ語では「内臓」とか「はらわた」を意味する言葉からできていることです。すなわち誰かの苦しみを見て自分の内臓やはらわたがよじれるような思いを持つという意味です。そしてもう一つはこの言葉は聖書ではイエス様あるいは神様にしか使われていないということです。私たちが家族や親しい人の苦しみ、苦しみを見て、胃が痛むとか断腸の思いといった気持ちを持つことがあると思います。しかしそういう人間のレベルをはるかに越える神だけが持つことのできる深いあわれみを表す際に使われています。たとえばこの言葉はルカの福音書15章の放蕩息子のたとえで、帰って来た息子の姿を遠くから見つけた父がかわいそうに思い、自ら走り寄って彼を抱き、口付けした場面で使われています。あのたとえは父なる神の私たちに対する愛またあわれみを表しています。あるいはルカの福音書10章の良きサマリヤ人のたとえで、強盗に襲われ半殺しにされた人を見たサマリヤ人がかわいそうに思い、近寄って傷の手当てをし、介抱した時にも使われています。これは私たちのそばに来てくださったイエス様をまず表しているたとえです。イエス様はその特別な目でこの時も群衆を見つめられました。ですから「深くあわれまれた」と訳されています。

ではイエス様は具体的に人々のどんな姿を深くあわれまれたのでしょうか。36 節に「羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである」とあります。聖書で私たちはしばしば羊にたとえられています。色々な所が似ているのですが、中心ポイントは人間は羊飼いが必要な弱い存在であるということでしょう。導いてくださる羊飼いがいなければ迷いやすく、危険に身をさらしやすい。その人間にとっての羊飼いは神ご自身に他なりません。ダビデは詩篇 23 篇で「主は私の羊飼い」と語り、私は乏しいことはありませんと言いました。羊飼いなる主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われる。また主は私のたましいを生き返らせ、外側の生活ばかりでなく、内側も生き生きとしたいのちの喜びに満たして下さい。この方が共におられるので死の陰の谷を歩くことがあっても私は恐れない、と。しかし人間の現実はどうでしょうか。人間はこの羊飼いから離れ、それぞれ自分勝手な道に向かって行ったとイザヤ書 53 章にあります。神に頼らず、従わず、自分の好きなように生きる生活を始めた。しばらくはそれで良かったかもしれませんが。しかし羊飼いのない羊はやがて悲惨に陥ります。ここの「弱り果て」という言葉は「皮を剥がれた」という意味の言葉です。野の獣に出会って引き裂かれたか、あるいは岩や木の枝に体を引っ掛けたか、皮を剥がれた状態で弱り果てている。もう一つの「倒れている」という言葉は「投げやられている」という意味の言葉です。様々な苦しみに会って死んだ物体と化したかのように放り出され、倒れている。私たちはこれを肉体的な病で苦しんでいる人のこととしてだけ考えるべきではありません。イエス様は群衆を「羊飼いのいない羊のようだ」とご覧になりました。これは外側の病気のことではなく、人々の霊的状态を見つめて言ったものです。私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。ある人はまだ健康であり、物質的にも生活に十分なものを持っているかもしれませんが。しかし導き手がないために人生をどの方向に向かって歩んだら良いのか分からない。人生の意味や目的が分からない。行き当たりばったりで、あっちに何か良いことがあると聞けばあっちにフラフラ、こっちに何か良いことがあると聞けばこっちにフラフラ。そうして危険な穴にいつしか落ち込んでいなければいいのですが、現実には何と多くの人々が道に迷い、傷つき倒れていることでしょう。また将来に対する不安と恐れの中で怯えていることでしょうか。イエス様はそういう私たちの霊的状态を見て深くあわれんでくださいました。このイエス様のあわれみは、イエス様を行動へと駆り立てずにいないあわれみです。イエス様はこういう目を持ってくださったので天の栄光の座から降りて、この地上へと来てくださいました。そして 35

節に記されているような活動に奔走されました。さらにこの深いあわれみの心に動かされて、ついに十字架上でご自身のいのちを私たちの救いのためにささげるところまで進まれるのです。私たちはまずイエス様がこのような目で私たちを見つめてくださったことを感謝したいと思います。この方がこの目をもって十字架にまで進んでくださったので私たちには救いが与えられました。この方を通して私たちはまことの羊飼いのもとに戻ることができます。ダビデのように「主は私の羊飼い。私には何も乏しいことはありません！」と喜びの叫びをあげることのできる者とされるのです。

さてこのような人々の霊的状态を見つめたイエス様にこの時、一つの問題がありました。それは助けを必要とする人たちがたくさんいるということです。必要大である！それに比べて働き手が圧倒的に少ない！これまでは 35 節に記されていたようにイエス様が各地を巡回して働きを進めて来ましたが、目を上げて人々の必要を見た時、一体どうやってこの多くの群衆に対処することができるのか。そこでイエス様はここから弟子たちもイエス様の働きに加わるように！と招いて行かれるのです。これまではイエス様が語り、イエス様お一人が働いて来られました。しかしここからは弟子たちもイエス様と共に神の国建設のために働く者となるように！と導かれて行きます。

さてこの際、イエス様は弟子たちに何と言われたのでしょうか。必要が大きいからあなたがたも来て一緒に手伝いなさい！と言われたのでしょうか。とにかくあなたがたの手足を貸しなさい！と言われたのでしょうか。そうではありませんでした。イエス様が言われたことは「収穫の主、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい」ということでした。ここに大事なポイントが語られています。それはこの働きは主の働き、神の働きであるということです。人間が主役ではありません。この宣教の働きは主の働きです。神の事業です。ですから私たちは人間的な思いで何かを始めてはならず、まず収穫の主、宣教の主である神を仰いで、神が必要なものを送ってくださるよう祈ることから始めなければならない。そして祈るべきは「働き手」であると言われています。宣教のための資金を与えてくださいとか、会堂を与えてくださいとか、設備を与えてください、ではない。もちろん今のことも祈って良い事柄だとは思いますが、何よりも祈るべきは「働き手が与えられるように」。これこそ祈るべきテーマとしてイエス様は示されたのです。

ではこの「働き手」とは誰のことでしょうか。それは主に祈り、主がお決めになって、遣わしてくださる人ですから、前もって私たちが決めることはできません。しかし私たちが真心からこの祈りを祈るなら自分が主から遣わされる可能性を除外して祈ることはできないと思います。私たちがイエス様と同じ心をもって、「主よ、働き手が足りませんから、どうか収穫のために働き手を送ってください！」と熱心に祈りながら、「でも私は何もしません」という祈りをささげることができるでしょうか。もちろん私たちは主の御心を求めるのですが、もし主がこの私を召されるなら私もそれをさせていただきます！という思いがそこになくては、この祈りを真に祈ることはできないと思います。私たちはそれぞれに神から何らかの賜物を与えられています。その神がくださった賜物をもって何か私にできること、何か神の国のためにささげて用いていただくべきことがあるはずです。そして祈りを通して導かれて神の国の一層の広がりのために、その働きの一翼を担わせていただけることは私にとってこの上ない幸いなことです。そのことにオープンな心で、主よ、働き手を送ってください！と祈るのです。そしてもちろん私のことだけでなく、さらに多くの働き手を収穫の主が遣わしてくださるように、そうしてこの神の一大プロジェクトがいよいよ前進するように私たちは主に求めるべきなのです。

この祈りを経て主から遣わされる 12 人のことが 10 章 1~4 節に記されています。イエス様は彼らに特別な権威を授けてこれから主の働きに遣わされます。この 12 人はどんな人たちだったでしょう。12 使徒の名簿は他の福音書にも載っていますが、それらと比べてこのマタイの福音書の名簿には特徴的なことが一つあります。それはマタイの名を記すところにわざわざ「取税人」という肩書きが付いていることです。マタイとはこのマタイの福音書を書いた著者のことです。取税人は以前に見ましたように、ユダヤ人から罪人として忌み嫌われ、見下されていました。その本来隠したくなるような言葉をマタイはあえて自分の名を記す際に付けました。これは主は取るに足りない罪人の自分を使徒として選び、用いて下さったという主の恵みをたたえるためでしょう。他の人々はどうでしょう。最初に記されている 4 人はガリラヤ出身の漁師たちです。これから神がご自分の国を打ち立てようとする時、田舎の漁師たちを選ぶとは一体誰が考えつくことでしょうか。都会の優秀な学者たちからではなかったのです。そしてその漁師の一人が

12使徒のリーダーとされました。その他はどうでしょうか。ピリポとトマスは他の福音書から若干その人となりを知ることができますが、バルトロマイ、アルパヨの子ヤコブ、タダイについて私たちはほとんど知りません。すなわち目立たない人たちです。また熱心党のシモンとあります。すなわちユダヤの愛国主義者で国のためなら暴力さえ辞さないという革命党に属していた人です。そして最後にイエス様を後に裏切るイスカリオテのユダが含まれています。彼についてはしかるべき個所を開いた時に詳しく考えたいと思います。今ここで注目したいことは、主に祈り、主によって遣わされた使徒たちは特別な人たちではなかったということです。これから世界に向かって大きな働きをしようとしているのに、こんな人たちで何になる？と思われるような人たち。社会に対して何の影響を持ちうるか？と思われるような人たちであった。しかし彼らは大切な使命を果たして行きます。すなわちこのような人たちであっても、主が遣わした器なら、主に用いられて大きな働きができるということです。とするなら私たちも、主が遣わしてくださるなら、主が必要な力を注いでくださり、こんな私さえも用いることができるということになるのではないのでしょうか

イエス様は「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい」と言われました。私たちは主の恵みによって、主の救いにあずかりました。なぜこのように導かれたかと言えば、私のところまでこの福音を届けてくれ「働き手」がいたからでしょう。私たちは神から直接、人を介さずにこれを受けたのではないと思います。主が色々な働き手を私のところに遣わしてくださり、その方の具体的な働きを通して、私はこの救いの恵みにあずかりました。とするなら私たちは自分のところでこの福音を止めてしまうことなく、必要としている多くの人々のために主に祈り、自らも喜んでささげて用いていただく者となるべきではないのでしょうか。今日のイエス様の言葉に従って、「収穫の主は、働き手を送ってくださるように！」と祈りたいと思います。その祈りを通して、御心に従って自らも用いていただきたいと思ひますし、さらに多くの働き手が与えられることを求めたいと思ひます。そうして主の御国がいよいよ広がり、喜びの最後の収穫の日を迎えるために、主とともに働き、用いられる幸いに歩んでまいりたいと思ひます。